

原子力委員会
新計画策定会議（第３３回）
議事録

１．日　　時　　平成１７年９月２９日（木）９：３１～１１：１３

２．場　　所　　如水会館　スターホール

３．議　　題

１．原子力政策大綱案について

２．その他

４．配布資料

資料第１号　「原子力政策大綱（案）」に対する意見募集にいただいたご意見への対応
（案）（改訂版）

資料第２号　原子力政策大綱（案）

資料第３号　御発言メモ

５．出席者

委　員：近藤委員長、井川委員、井上委員、岡崎委員、勝俣委員、神田委員、木元委員、
草間委員、児嶋委員、齋藤委員、笹岡委員、佐々木委員、殿塚委員、中西委員、
庭野委員、伴委員、前田委員、山地委員、山名委員、吉岡委員、渡辺委員

内閣府：塩沢審議官、戸谷参事官、森本企画官、赤池補佐

6．議事概要

（森本企画官） それでは、定刻となりましたので、第３３回の新計画策定会議を開催したいと思います。

それでは、委員長、よろしくお願いいたします。

（近藤委員長） おはようございます。第３３回の新計画策定会議でございます。ご多用中のところ朝早くからご参集いただきましてありがとうございます。

本日は、１１人の委員からご欠席のご連絡をいただいています。内山委員、岡本委員、河瀬委員、末永委員、住田委員、田中委員、千野委員、町委員、松尾委員、橋本委員、和気委員の方でございます。最終回になるはずのところ、残念だということのリグレットを添えての御連絡でございました。お知らせいたします。

さて、本日の議題でございますが、前回の３２回の審議結果を踏まえて政策大綱（案）に対する意見募集の対応、あるいはその本体について手直しをしたものを用意いたしましたので、これを御審議いただくということでございますので、よろしくお願いいたします。

最初にまず資料の確認からしていただきましょうか。

（森本企画官） 今日の資料、番号としては１番から３番まででございますが、資料第２号が３種類に分かれておりますので、確認いただきたいと思います。

資料第１号が意見募集にいただいたご意見の対応（案）（改訂版）というものでございます。それから、資料第２号が原子力政策大綱（案）、それから資料第２号続きで、綴じる都合で資料、用語集等でつづりにしてあります。それから、資料第２号の補助資料として見消版で大綱の本文、それから資料第３号御発言メモというのを用意しております。落丁等あれば挙手をお願いいたします。

（近藤委員長） よろしゅうございますか。

全員おそろいになった。それでは、まず事務局から資料についてご紹介いただいて、と思いますが、よろしゅうございますか。

それでは、よろしくお願いいたします。

（森本企画官） それでは、資料第１号と、それから第２号の補助資料、見消版を用いてご説明をいたします。

資料第１号は、第３２回策定会議に「意見募集にいただいたご意見への対応（案）」として用意したものに付き、９月１６日の当日、近藤議長からも再度詳細な見直し等を行いますと申し上げたとおり、事務局の方で再度精査を行ったものでございます。全てをご紹介するのもい

かがと思いますので、幾つかちょっとピックアップしてご紹介させていただきたいと思います。議場で明示的に委員の方々からご指摘のあったところで、例えば、核燃料サイクルのところで、資料第1号47ページの真ん中ほど、6-32という番号がございます。ここは、当日伴委員から、直接処分の費用算定の根拠及び想定と合意内容について、今の記載と問いが合っていない、あるいは書き過ぎではないかというご指摘があったところでございまして、これはご意見の内容を丁寧に記載するとともに、その対応を正確を期した書き方にしております。同様の、この直接処分等の想定に関して、例えば6-31というのが直前にございますが、ここでも不足している知見の具体的内容等を追記しております。ここが、明示的にご意見いただいて、その場で修正しますと申し上げたところでございます。

これ以外にも、全面的に再度チェックはしておりますが、文章として変えましたところにつきまして、二、三ご紹介させていただければと思います。

例えば、安全の確保の章を見ていただきますと、例えば11ページの1-48というところがございますが、高経年化対策について、研究機関が何をすべきかといったようなことについて、前回の本文の方でも若干既に記載があったところでございますが、その本文を引用する形での追加、また12ページの1-56、これご意見比較的多かったところでございますが、リスクコミュニケーションの徹底につきまして、再度意見を読みかえし、ご意見への対応のところで漏れがないように記載をしております。

その他、こういう形で再度見直したものにつきまして記載をしております。安全の確保のところについて申し上げましたが、ほかのところでも二、三ございます。

例えば、人材の確保につきましては、21ページの3-24では、原子力・放射線技術士、あるいはほかの技能資格制度についてのご意見でございましたが、これ後ほど本文の方でもご説明させていただきますが、笹岡委員からのご指摘で本文の方も修正しておりますので、それに合わせてこの意見対応の方も正確な記載とさせていただいております。

そのほか、個別に申し上げるといろいろありますが、核燃料サイクルのところで、あと二、三ご紹介させていただきたいと思います。

42ページに、6-8というところで、10の視点の評価の項目について記載しているところですが、ここにつきまして、例えば経済性の比較等についてのご意見、それからご意見への対応、真ん中辺にございますが、ここにつきまして設計の余裕を持たせている等の記載を丁寧にしております。

また、43ページ、44ページにつきましても、43ページは先ほどの引き続きの項目でご

ざいますので、再処理の技術的措置、混合酸化物粉末を使うというような記述、または統合保障措置等についての説明の記述を追加して、ここの項目を読めば一応答えがわかるようにという配慮のつもりで記載をしております。

このような形で、再度追記をしておりますが、一つ一つの説明につきましては割愛させていただきたいと思います。

次に、前回のご審議を踏まえ、本文を修正したものをご説明させていただきます。

資料第2号の補助資料というふうに右側にございます。こちらの方が前回、第32回からの変更点を記載したものでございまして、これにつきましてページを追ってご紹介させていただきたいと思います。

「目次」、それから「はじめに」につきましては、「はじめに」の2ページでございますが、用語の適正化や策定会議の回数等を追加したものでございます。

それから、第1章、共通理念、基本的目標等につきましては、草間先生から用語の統一等について前回当日メモでいただいておりますので、6ページの用語等の訂正をさせていただいております。6ページの上から2つ目のパラグラフに「事故・トラブル」のところで修正を入れております。

それから、現状認識につき、10ページ、11ページ、これは1-2-6．エネルギー安定供給と地球温暖化対策への貢献というところでございます。これの3つ目のパラグラフの「具体的には、」という以下のところですが、第32回の会議で伴委員の方から新エネルギー、あるいは再生可能エネルギーの現在の課題とそれへの取り組みというのがウランを使った原子力発電等の比較でバランスがとれていないのではないかというご指摘をいただいたところに基づきまして、左側の現状のスナップショットを示したところについて、「現在のところ、」ということをはっきり入れるとともに、常に技術開発が行われているということ、それからそれによって改善が進んでいるという今後の方向性を示すために、11ページと同じ1-2-6ですが、最後のパラグラフに「エネルギー技術は引き続き研究開発が行われており、その進捗に応じ、」という形で、取り組みが行われていることをよりはっきりさせる形で入れております。

それから、引き続いて12ページ、核燃料サイクルの確立の現状認識のところでございますが、これは12ページの2つ目のパラグラフの7行目ぐらいからですが、「再処理で回収されたプルトニウム、ウラン」というところにつきまして、回収ウランの利用の多寡についての議論、あるいはむしろ再処理で回収されたプルトニウムを本来ここは記載するについての記載を行うべきであるという論理構成のところにつきまして、伴委員からご指摘いただいたところ、

そのパラグラフの中で論理が完結するように、つまり「回収されたプルトニウムについては、」ということで記載を始めて、それをプルサーマルが計画されていること、それから加工をどこで行うということ。この中で、日本語の表記として、「については、」という部分が何度か繰り返しがあったところもあわせて草間先生からご指摘いただいたところに基づいて直しております。

次に、第2章以降の取り組み編でございます。第2章、2-1. 安全の確保につきましては、漢字の表記等の訂正に加え、内容としましては、19ページのちょうど真ん中あたりに規制体系の改革と今後の検証を行っていくことが重要であるというパラグラフがございますが、ここにつきましても、原子力安全・保安院が整備されたところからスタートして記述すべきというご指摘を踏まえまして、その旨を追記しております。

同じく第2章の放射性廃棄物の処理・処分の取り組みの中で、25ページ、高レベル放射性廃棄物に関する研究開発成果が国の安全規制、あるいはNUMOの処分事業に有効に活用されるように配慮すべきというのが2つ目のパラグラフでございます。ここにつきまして、2行目の「知識管理」という言葉を使っていたのですが、これはナレッジマネジメントという趣旨で使っていたものの、情報を秘密にするような、管理をするような形に誤解されてはいけないということで、それならば趣旨をはっきりさせるという意味では後ろがポイントになりますので、手前を消去しております。

それから、27ページ、人材の育成・確保のところでございますが、ここは前回の会議で笹岡委員から、現場がいかに元気が出るということが重要であるところ、やはり魅力を取り戻すというのでは現場で頑張っているところに元気が出ないというご指摘もございまして、「職場が魅力のあるものである」という表記を入れるとともに、下に「・改善」という言葉、それから次のページへまいりまして、これはほかの方々からもご意見いただいたところでございますが、資格を持った人材の活躍について、これまでも記述をしていたものの、さらに「法定の責務を果たすのみならず、優れた知見と倫理意識を有した人材として活躍する場を広げていくことも重要である。」という部分を追記しております。

それから、28ページから29ページ、国民・地域社会との共生、透明性の確保に続いて広聴・広報の充実とあるところですが、前回も一部「等」が抜けていたのを橋本委員からご書面でいただいて追記しております。それとともに、電力の供給地と消費地の相互理解の活動がまだまだやはり不足している、あるいは認識不足もあるのではないかとという橋本委員からのご指摘も踏まえて、表現をよりはっきりさせるように、また「強化するなどの工夫を凝らしつつ、

多面的な理解促進活動を引き続き行っていくべきである。」という形で趣旨を追記しております。

それ以降、31ページに若干「等」を追記し忘れのものを入れたりしておりますが、「てにをは」を除けば内容的な修正は以上でございます。

これで前回のご指摘を踏まえた修正になっているかと思います。

以上でございます。

(近藤委員長) 以上、前回のご議論を踏まえまして、作業させていただきました。事前に資料をお送りする際に、私の名前で若干の解説を申し上げましたところでございますが、政策大綱(案)につきましては、パブコメを踏まえての皆様のご発言を踏まえて修正をさせていただくと、それから国民の皆様からいただいたご意見の対応につきましては、ご意見に関係したここでの議論の結論のみならず、その経緯が伝わるようにと指示し、大分書き込みを増やす作業をさせていただきました。適切な表現かどうかはわかりませんが、この大綱のいわばQ & Aになっているのかなというふうに、そういう心持ちで作業するよということを指示してたところです。100%そうかと言われるとあれですが、事務局としては大変頑張っていたのかなと、自画自賛してはいかんのですけども、考えているところでございます。

それで、本日はそれらに対する委員の皆様からの事前のレスポンス等を踏まえますと、資料第2号をこの策定会議のアウトプットとすることについて、皆様のお立場の表現をいただくのが適切なのかなと考えるところでございます。書面で既にご意見をいただいている方もいらっしゃると思いますが、今日はその趣旨で従来のパターンと変えて、座っている順番で一人ずつご発言いただくことにしたいと思いますが、いかがでございましょうか。

よろしゅうございますか。

それでは、殿塚委員からこちら回りでご発言いただくことにいたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(殿塚委員) トップバッターを賜りましてどうも恐縮でございます。私もこの会議に33回皆勤で出席させていただきました。万障繰り合わせて出たつもりでございます。

ここでうたわれております基本方針、方策につきましては、あさって10月1日に日本原子力開発機構が発足いたしますが、機構の業務と大変関わり合いのあることが多く記載されているわけでありまして。その新組織における中期計画の中にきちんとこの方針というものを反映させまして、しかと成果を出していかなばならんという思いでございますので、皆様方のご支援、

ご協力を改めて賜りたいと思っております。

この大綱の感想を2点ほど申し上げさせていただきたいと思います。

1つは言うまでもなく、核燃料サイクルに関する問題について従来タブー視されていたいわゆる使用済燃料の直接処分の問題等々、技術的な問題も含めて、大変入念な議論を長時間かけてとり行ったということと、それから改めて核燃料サイクルの路線というものを確認したということが非常に長期的な原子力路線を形作るものであるという意味において、非常に重要なことであると改めて感じております。

一方では、この政策大綱という名前の変更も示しているように、柔軟性というものを従来の計画に比べて導入したということがやはり特筆されるべき問題だろうと思います。したがって、長期的に堅持しなければならない路線と、それから中期的にフレキシビリティをもって対応しなければならないという問題が2つ併存していると。特に後者の問題をどういうふうに具体的に、その時々状況において変えていくのかということが今後の課題になるのではと思っております。

2つ目は我が国が核燃料サイクル路線をとるということは言うまでもなく、プルトニウムを扱うということですから、従来、核の平和利用という基本的な大前提があったわけですが、改めてこの核の平和利用という基本路線をやはり片時も忘れてはならない大前提と考えて、この大綱に記載されている方針を今後とも実施していくということが不可欠である。こういう平和利用の基本路線を世界に繰り返し、繰り返し発信していくことが国際社会の中で、日本の存在を明らかにしていく上で重要と感じております。

以上であります。

(近藤委員長) ありがとうございます。

中西委員。

(中西委員) どうもありがとうございます。私は1回休んだくらいですけども、ほぼ皆勤に近い状況でございますが、いろいろ学ばせていただきました。

私は、放射線利用という立場から参加させていただきまして、非常に今利用する人の数が減っているということで、放射線を利用したいろいろな分野がどんどん人がいなくなるんじゃないかということが一番懸念されております。それで、何とか活性化して、それで周りに住む方たちとのリスクコミュニケーションを通じてうまくコミュニケーションできたらということをぜひこれから目標にしていだけたらと思っております。

大綱は理念といいますか、すごく努力されて非常にいいものができていると思いますが、こ

れを施策に移す場合に、いろいろなものが抜け落ちたりとか、いろいろなことがあるかと思えますので、きちんとここで議論されたことを施策に移していただけたらと思っております。

近藤委員長を始め、大変なご苦労があったかと思いますが、どうもご苦労さまでした。

以上です。

(近藤委員長) ありがとうございます。

欠席何回とかと、告白合戦はしないでいただいと存じます。こちらが大変無理を申し上げて日程を調整しているわけですから、それぞれ大変な本務を抱えての中でおつき合いいただいたことについて、私どもは申しわけなく思っているということでございますので、ぜひそこは割愛して、この(案)に対するご意見をいただければと思います。

庭野委員。

(庭野委員) ありがとうございます。

それでは、そのご趣旨に従って何回とは言いませんけれども、33回をやったということから考えますと、この今回の政策大綱については、今までと少し違った点というふうに感じていますのは、やはり正面から現在抱えている問題に直接逃げないでいろいろやったというふうに思っています。再処理の問題から始まったわけでありますけれども、最近の事故に対しての対応とか、そういうものも全部やられたということで、これで解散になったんだというふうに思っています。そういう意味では、いろいろなあらゆる議論をした上でこういう結果になったというふうに私自身は認識しております。

特に、私どもの立場から言いますと、従来ですと製造業者と電気事業者という点ではもちろん当然重要な位置づけになるわけですがけれども、製造業者という点からいろいろな責務もしくは義務、そこで対応すべき点というものを取り上げていただいたということは今後我々にとって非常にある意味では厳しい対応をしなきゃいけないということでありますけれども、それを我々真摯に受けとめて、我々としてやるべきことは今まで以上に、また襟を正してしっかりやっていくという覚悟でございます。

そのうち、特に現在、我々は国内外も含めて将来に対する人材の確保等いろいろやっているわけですがけれども、何といたっても仕事の確保が第一ということで、現在海外に向けていろいろと可能な限り展開しようということでやっております。それを正面から取り上げていただいたということ、これは我々にとってみれば、国の基本的な方針としてそういうことをバックアップしていただけると同時に、我々がそれに対する強靱な体質を作らなきゃいけないというようなことを求められているというふうに思っています。それに対して、我々としても、

今後国内のプラントの改善、改良も当然でありますけれども、それをさらによくするということで、海外でのビジネスを展開することによって、そちらでの安全対策、文化とかそういうものも取り入れていくというような融合も図っていききたいというふうに思っています。

いずれにしても、これだけの長期間にわたって冒頭申し上げましたように、正面からいろいろな問題に諸問題に対応されてここまでまとめ上げていただいたという原子力委員会の委員長を始め、皆さん方、また事務局の方、皆さん方のご苦勞に対して改めて敬意を表したいと思っています。

どうもありがとうございました。

（近藤委員長） ありがとうございました。

伴委員、メモありますね。

（伴委員） はい。

初めて原子力政策の策定会議というのに参加させていただきまして、自分の経験としても大変いい経験になったというふうに思っております。

政策がどういうふうに作られていくのかというのを体験したということで、そして事務局の方にはほとんど毎回のように事前説明に来ていただきまして、それも大変よかったし、感謝を申し上げたいと思います。

32回の策定会議にありました少数意見ということで、お手元にあります発言メモに反対意見という形になっていますけれども、まとめてきました。

それで、評価できる点、幾つかあるなというふうに思っています。意見募集のあり方について2回ほどやっていただきまして、まだこれは改良の余地ありとは思いますが、私の趣旨としては一遍出して回答が返ってきておしまいというのではないやりとりができるようにというふうなつもりで提案して、複数回行われたという点、それから核燃料サイクル政策について、複数の選択肢を抽出して行った初めての試みというんですか、そういう方法は評価できる、内容2は別ですが、できるというふうに考えています。また今回は、安全の確保の重要性とか、それから国民の原子力政策への理解と信頼の大切さ、参画というような言葉も出てきたと思いますけれども、これは一応まだ確立されていないという認識を示しつつ、その重要性が指摘されていたこと等はよかったというふうに思います。

私は、脱原発という立場からかかわっていて、必ずしも前へ進めるだけではない、後ろに下がる計画もあってもよいだろうというふうなことで発言をしてきました。一応、今回の策定会議では、原子力に関する総合評価とか、脱原発を含めた総合評価等々については、吉岡委員は

多分前回の長計のころから主張されていたと思うんですけれども、されなかったのが非常に残念で、次の課題であるというふうに認識しています。

そして、いろいろ評価できる点があるということを認めつつも、この政策大綱の内容には同意できないところも多くあり、中でも特にこれは同意できないという点について、紙面の関係もあり、3点ということに絞って書いてきました。

1点目、これまで僕は毎回は意見書を出せなかったんですけれども、自分の思ったり考えたりしているほとんどのことは、そこで出してきたということもありますが、ですから繰り返しのようになってしまっているんですけれども、その3点についてをまとめますと、1つは2030年以降も総発電電力量の30%から40%程度という現在の水準か、それ以上というような供給割合を原子力に課しているということについてです。

ここでは、さらに加えてということで、最新の知見として、その策定、大綱には反映させたという高経年化対策問題と、今まさに進行中の地震の問題、2つについて言ってこなかった点を書いていますけれども、高経年化が進む中、また地震の危険も指摘される中、その長期間にわたる運転及び、この言葉は原子力発電所のライフタイムを60年に延長することも含んでいると思いますので、これは大変危険な状態になっていくのではないかと危惧をしていて、そういう点からこういう数値目標を入れるということについては、絶対同意できない。

2つ目は、総合評価されたんですけれども、従来の核燃料サイクル政策が踏襲された点、これもいろいろ意見を言ってきましたけれども、やはり結論として同意できないというふうに考えています。

それから、3点目は、高速増殖炉についてですけれども、2050年以降商業ベースの導入を目指すというふうな基本的な考え方が取り入れられてしまったこと、一応これ柔軟性ということが書いてあるんですけれども、しかしこういうふうに商業化を目指すというふうなことが書ける段階ではないのに書いているという意味で私は同意できないと考えています。

ですから、特に2の3点について同意できないということで、一応これまでの反対意見をまとめる形で反対意見として提出しました。

以上です。

(近藤委員長) ありがとうございます。

前田委員。

(前田委員) 昨年6月にこの策定会議が始まったわけなんですけれども、当時を振り返ってみますと、原子力発電所や再処理工場での不祥事だとか事故、トラブル、また策定会議が始まって

以降も美浜の事故ありましたし、それからバックエンドにかかわる怪文書が出たり、あるいは直接処分の試算隠しがあったりとか、非常に社会的に原子力に対する批判、逆風の強かったときにこの策定会議が始まったということです。

それで、この策定会議においては、全ての議論を公開にして、それで聖域を設けずに議論をしようということで33回にわたる議論、本当にいろいろな角度から総合的に議論を進めてきたと、こう思っております。

本日、取りまとめになったわけですが、その取りまとめの中で、幾つか私申し上げたい重要なポイントだと思うことがあります。

まず最初に、事故の反省に立って、国と事業者ともに安全確保ということを最大の課題であるというふうに位置づけて、その上で国民の信頼と地域社会との共生というのが原子力推進の重要基盤であるということをはっきりとしたこと、それから電力自由化のもとでも原子力発電のエネルギー、セキュリティとか地球環境とかそういった面でのメリットといいますか、貢献を十分に発揮させるためには、官民が役割分担しつつ、発電電力量の30ないし40%を目指すということをはっきりと示したこと、それから将来の努力すべき目標として高速増殖炉の導入を掲げたこと、こういったことが非常に意義のあることだったと思っております。その中でも、特に核燃料サイクルにつきまして、4つのシナリオ、10の視点から評価をしてこれを我が国の基本政策として再確認したということ、これらは今後の我が国の原子力政策にとって非常に重要な意義のあることだったと思います。したがって、私は本日の大綱（案）に賛成であります。

最後に、ちょっと原子力委員として一言、策定会議の委員の皆様方、本当に33回にわたる長丁場の議論で、それぞれのお立場、お考えに基づいて熱心にご議論をいただいたこと、その結果として本日の取りまとめに至ることができたということに対して原子力委員として感謝申し上げます。

以上です。

（近藤委員長） ありがとうございます。

山地委員。

（山地委員） 今回の策定会議は我が国の原子力開発50年というか、原子力委員会の50年でもあると思うんですが、その区切りとして非常にいい会議だったと思っております。

そもそも原子力の政策に関して、いろいろ異なる意見、考えがあるというのは当然のことなんです。それをきちんとその存在を認めて議論を進めてきたということが重要ですね。それが

ら、その中で、しかし政策決定はやはり決定をしていくわけです。私は大事なことは政策判断の決定の責任をきちんととっていくということであると考えます。委員会の結論が政府の決定となって実行に移されるときの責任の所在をきちんと明確にしていくことが重要だと思っています。

評価的なことを申し上げます。

まず、そういう意味では、この会議の審議のプロセス自体は非常に高く評価するものです。つまり、選択肢を挙げて議論したということ、それから近藤先生が委員長就任冒頭から言われた定量的に検討するということもある程度行われたと思います。

その中で意見が分かれているところとしては、今伴委員もおっしゃったし、吉岡委員のメモ等にも私読んで拝見していますけれども、幾つかある。1つは電力に占める原子力のシェアとして30ないし40%プラスアルファというのがあるわけです。この議論は、確かに議論は不足していたと思うんですけれども、電源構成について、いろいろ私自身の研究の中でもやってきましたけれども、固定費と変動費との関係と、それから電力の負荷特性の関係で最適構成で決まるわけですし、それからそれに加えていろいろなリスクがあるんでね、発電所なんか止まる可能性もあるというようなことを考えると、一定の最適な比率というのが得られるわけです。原子力の場合に、それが30ないし40%、プラスアルファの方は、私はそれほどでもないと思うんですけれども、50%ぐらいまでのところというのは常々思っていたことですので、結果に関しては納得しています。ただ、議論が不足していたということは言えるかと思います。

また、高速増殖炉の実用化について2050年ということが明記されているわけですが、これも議論は随分不足したと確かに思っていますが、私はこの問題について、この会議が始まる前のヒアリングで自分の意見を述べたことがありまして、世界規模での話が多かったんですけれども、温暖化対策で原子力はやはりオプションとして非常に重要な役割を果たすわけです。特に、21世紀の後半からの重要性ということを見ると、目標として2050年ごろからの実用化を設定するということの合理性を私は感じております。だから結果には納得しているんですけれども、議論は確かにちょっと足らなかったかなと思っています。

それから、もう一点目の再処理ですけれども、これは今再処理を行うことの経済的な不合理性に関しては認識は共有できたと思っています。これは、私は一歩前進だと思います。ただ、現行の政策を変えるということも非常に大きなリスクを伴うことで、いかにこれを変えるということが困難かという現実も私自身も認識したところです。政策変更コストという定量評価に基づいて、この結論を導いたような書き方になっていますけれども、私はそれも1つですが、

やはりそれだけじゃなくて、現実の国と地方との政治的な力のバランスとか、それから一般の方の理解とかということから考えて、今これは経済的には不合理ではあるけれども、だからといってやめてしまうのが現実的かというとなかなかそれも難しい。だから、多少は勇気が足らなかったなという気が私自身を含めてしないではないんですが、非常に大きなリスクのある構造の中で蛮勇を振るうというのはやはり危険なことでありますので、その点は私自身が自分自身を納得させるプロセスでありました。

ただし、プルトニウムに関して、供給ありきで政策を形成していく議論は明らかに不合理であって、必要なプルトニウムを生産していくのが本筋です。そういうことに関しても、ある程度この会議を通して理解が得られたんではないかなと希望しています。そういう倒立した議論に今後ならないように十分注意していきたいと思っております。

いずれにしても、今までの原子力委員会の長計の議論に比べますと非常に画期的なもので、成果が得られたと評価しております。

（近藤委員長） ありがとうございます。

山名委員。

（山名委員） ありがとうございます。

総論といたしまして、今回の政策大綱には賛成いたします。私としては、これはある種原子力の国としての取り組みの仕切り直しが行われたものであるという認識であります。その根拠は幾つかありますが、1つは現状の問題を直視したこと、これはここ5年間の非常に赤裸々な問題を直視したこと。それから原子力の理念と原則が明白に書かれたということでもあります。ここ数年間原子力がやや混乱状態にありましたのは、やはり原理原則が見えなくなっていたんではないか、やはり原理原則に立ち戻るといふことの重要性がこれによって共有できたんではないかというふうに考えております。

それから、国民、地方との共生、対話、広聴のことを非常に大きく書いた。これも非常に大きな仕切り直しの前進であるというふうに考えております。

これにつきましては、政策側が表現したいこと、技術者が表現したいこと、国民が理解して取り組んでいること、国民が心配に思っていること、これは見ているものが一致しない限り原子力は成立しないわけですから、そのうちの一つでも近づける努力はやはり常に必要である、そのことが明記されたことは非常に価値があると思います。

それから、4つ目ですが、反対意見に非常に耳を傾けたという近藤委員長の姿勢、これを非常に高く評価したい。特に伴委員は反対意見を多く述べられました。私は意見の結論に関して

は見解が違いますが、何を心配しているかということは伝わってくるわけですね。どういう観点で何を心配しているかということがわかる。最終的に私は技術者として伴さんとは結論が違いますが、何を心配しているということを明確にここで述べ合ったということは非常に重要なことであったというふうに思います。

それから、今回私は技術分野にありますが、えてして原子力の技術的に表現したいことと、政策表現が一致しないことが過去にたくさんあったんです。これは技術者としてこう思っているけれども、政策的な表現になるとちょっと違うなど。ただ、その裏はこういうことなんだということでもみんなが理解してきたんですが、その手法がなかなか一般国民に伝わらないという問題があったと思うんですね。今回の政策大綱は技術的表現がかなり政策的表現に近づいたというふうに私は思っています。これもかつてなかったことであろうということになります。したがって、この政策大綱がこのまま政策として選ばれていく場合には、その裏にある技術的見解が何か、判断が何かということは常に問われることになる。それに対して、技術者なり、産業界なり、事業者は答えていく責務を負っているということを意味しているんだと思います。

それから、今回この大綱に賛成であります。宿題が幾つかあるということだけはこの場で共有しておく必要があるだろう。

1つは、2010年ころ以降、今後の核燃料サイクルのあり方をもう一度考えようと。これもやはり現実を直視しながらベストな解を考えるという努力をまたやっていくということの意味しております。それから、特に廃棄物の処分、廃棄物の規制のあり方については、幾つかの積み残しがあるということが政策大綱にも明記されました。これについては、規制行政庁、原子力安全委員会を含めて一刻も早く国民にわかりやすい廃棄物の対策を提示していくということが宿題になる。それから、FBR、これにつきましては、現在の実用化戦略研究の結果を受けて、リアリスティックな方針を決めていくという方針をこの中で明記しました。それに対して、技術的な答えを国民に提示していくという宿題が与えられたということでもありますから、これはFBRの開発に従事している殿塚理事長を始め、技術畑の方々は国民からは非常に重い負託を受けているということを強く認識すべきであると。技術判断に責任を持って答えを出していただきたいということでもあります。

最後にバックエンドのことが議論されまして、ある種の答えが出てまいりました。基本的に大事なものは、我が国は原子力に依存していかなざるを得ない状況にあるということは明記されております。安定なバックエンドというものをどうやって作っていくかということを実際に考えるということでもあります。ここで、議論された中でも、再処理に反対であるという意見をたく

さん聞いておりますが、ではほかのオプションに対して、リアリスティックな政策が得られるかという議論は実は十分尽くされていないんです。オプション評価はしましたが、対案・政策は何かというのは出ていないんですね。であれば、再処理路線を1つの基軸にしながら、安定なバックエンドというものを真剣に考えるというアプローチがこの政策大綱から真剣に始まったというふうに私は考えております。そういう意味で、今回は原子力政策大綱が原子力の仕切り直しになったんだというふうに解釈しておりまして、全面的に賛成しているということでございます。

以上です。

(近藤委員長) ありがとうございます。

吉岡委員。メモがありますね。よろしくお願いします。

(吉岡委員) このメモは6枚からなりまして、2枚は私の提出している少数意見案で、あとの4枚は第1回の発言要旨であります。ほとんど同じことが書いてあるのと、そういうことを、思い出させるために並べてあるわけでございます。

まず、最初に忘れないうちに言うておくことがあるんですけども、この政策大綱(案)というのが、この後どうなっていくのかの見解をお伺いしたい。つまり、原子力委員会決定にはなるんでしょうけれども、政府決定になるのか、なるとすればどういう扱いになるのかの見通しを聞かずに解散というのはやはりまずいと思いますので、後でその回答をお願いしたい。それと英語版をついに最後まで出してくれなかったということですけども、ぜひお願いしたい。私たちの翻訳も参照の上、やっていただければありがたいと思います。

それで本論に入りますと、原子力政策大綱(案)の示した判断のうち、中枢的な要素は4つだと思うんですけども、4つ全てに反対であるということです。総論賛成ということをおっしゃった委員が何人かあるけど、私は総論反対です。ただ各論では同意する部分がざっと見れば半分ぐらいかなというような、そういう感じですね。特に政策評価についてはかなりよく書いてあるところもあるという、そういうことであります。

何度も言ってきたんで、読み上げるなんてことはしませんけれども、一番最初から私が言ってきたのは自己決定、自己責任の原則です。一切の無用な優遇・支援措置は省いて、火力とがちんこで勝負をやって、原子力が残るなら残る、つぶれるならつぶれるという、そういうような仕組みにしようという提案したわけですけども、どうも全然そうならなくて、官民一体的に進めるというような趣旨の表現がむしろ重要な部分で多く使われるという、そういうような結果になったと思うんです。この部分で私の願うところと正反対の趣旨になったということは遺憾

であるというのが、この政策大綱（案）についての最大の異論であります。

第2は、商業原子力発電政策についてですが、超長期的に30%から40%という、固定的な数字をめざすというのは政策論としてはあり得ない話だと思うんですね。なぜあり得ないかは何度も言ってきたんで繰り返しません。2050年ごろからの高速増殖炉の商業ベースの導入も、政策論としてはあり得ないと思っておりますので、やはり書かせていただきます。

これらは重要な部分ですから、これらに同意できないということはおのずと政策大綱（案）そのものに同意できないということの重要な要素を作っているわけです。

核燃料サイクルバックエンド政策については次のページをめくっていただきます。前回分厚い緑の表紙の報告書を机上配付しましたがけれども、ここに私の意見が全て書かれているわけではなくて、私のもとで仕事をしてくれた多くの人の意見をまとめているわけです。私自身の意見については、より細かいことが今まで発表した255ページにのぼる意見書の中に、何度も何度も書かれておりますので、改めてご覧いただければありがたいと思います。

残念ながら、国際評価パネル報告書についてのディスカッションはこの策定会議ではできないようではありますが、まだ不確かではありますが、10月23日に報告会を開いて、できれば外国人メンバー1人は呼びたいと思っております。皆様に招待状を出しますので、ぜひ来ていただければ幸いです。そこで忌憚のない議論を交わすことができればありがたいと思います。事前の宣伝でございます。

4番目ですけれども、日本は核軍縮、核不拡散について非常に強い前向きな姿勢を持ってきたという認識が一部にある一方で、私としてはそうではなくて、日本は核愛好国的な政策を昔からとってきたというのが、私の認識です。それはいろいろなところに書いてありますからご参照を願えばいいんですけれども、そうした昔からの傾向がより強くなったということが、今回の政策大綱（案）及びそれにめぐる議論の中に見受けられる特徴であろうと思っておりますので、それについても同意できないという旨を表明させていただきます。

意見書の総集編255ページ、これを当初は配布資料とさせていただきたいと心の中では思ったんですけれども、事務局が大変だろうということで、ウェブだけで出すという扱いにするようお願いしたところ、配布資料以外はウェブでは容量がむだになるので出せないというような返事が返ってきて、私としては非常に遺憾なんですけれども、私は親心でウェブだけでいいよと言ったのが、配布資料にしなきゃだめだというようなことでした。それならば配布資料にしると今日の朝言ったんですけれども、もちろん間に合わなかった。この総集編を後で配布していただくという可能性も含めてさらにご検討のほどをお願いいたします。

最後ですけれども、6ページ以降は、第1回の発言要旨ですけれども、第1回から「自己決定・自己責任」について、1行目から、執拗に言ってきたんですけれども、どうもそうはならなかった。次のページ、7ページでは政策のリアリスティック・ターンについて書きました。目標設定における非現実性、理由説明における非現実性、将来展望における非現実性の3つを挙げています。1に関しては原子力商業発電、2に関してはサイクルバックエンド、3については高速増殖炉にそれぞれ対応づけて書いたんですけれども、最初から言っていた私の意見が全然通らなかった。だから少数意見を書くんだという、そういうバックデータとして、これをもう一度読み直していただければありがたいと思います。

以上です。

(近藤委員長) ありがとうございます。

渡辺委員。

(渡辺委員) 私の基本的な立場につきましては、パブリックコメントに入る前の第31回ですか、策定会議のときに申し上げた立場で変わりがないので、そのようにご理解いただきたいと思います。

その上で、今日は最後ということですので、今後に向けたことを少し申し上げさせていただきたいと思います。

これまで、何度か日本の原子力政策は、本来多くの国民の信頼とか理解、それから納得の上に進められる必要があると思っていますと申し上げてきましたが、そうした意味でいいですと、今回の策定会議の委員構成なんですが、全体の委員数が多くなっていて、直接的な利害関係者といえますか、原子力村の関係者があまりに多いというふうに思います。一方で、国民の不安とか多様な意見を酌み取るという点では、バランスに欠く面があったのではないかというふうに感じております。私自身はできるだけ多くの国民が持つ不安とか懸念を率直に申し上げてきたつもりですが、この場での多数による圧力を感じざるを得ませんでした。それでも、前よりは改善されたのかもしれませんが、それから近藤委員長には運営上で様々な配慮をいただいたと感謝しておりますが、次にこうした場を持つときには全体の人数とか委員構成のあり方とか、もう少しよく考えていただきたいというふうに思っております。

それから、原子力委員会自体のあり方とか、それから原子力委員会とは何なのかということについての問題ですが、これは原子力行政のあり方全体の問題を先送りしてしまったために議論が深められなかったというふうに思っております。行政改革が引き続き重要なテーマとなっている中で、この策定会議が終わった後、原子力委員会は何をするのか、このことは引き続き

問われているのではないかというふうに思っています。

それから、最後に前回の繰り返しで申しわけないんですが、安全の確保と国民の信頼を得ていく上で事業者におけるコンプライアンス経営の確立とか、それから組織風土改革、原子力関係者の意識改革が重要であるということについては、何度か述べさせていただいてきました。電力会社のホームページを見ていまして、コンプライアンスへの取り組みとか、それから「しない風土」、「させない仕組み」への取組などがホームページのトップページに位置づけられていたり、それから公益通報窓口を含めてその取り組み内容がきちんと公開している会社とそうでない会社があります。実際のところは、コンプライアンスが組織風土改革の取組がどの程度までできているのかというのは、外から見て、外部から見ていると、よくわかりませんが、不祥事とか事故を起こした会社は当然のこととして、むしろ今まで問題が顕在化していない会社こそ真剣に考えていかなければならないのではないかと思いますので、再度申し上げさせていただきます。

以上です。

（近藤委員長） ありがとうございます。

井川委員。

（井川委員） メディアの立場からということで参加させていただきました。それで、結構好きなことを言わせていただきまして、にもかかわらず、事務局の方が適切にメディアのことはほんの数行しか残らずまとめていただき立派な大綱になったということに感謝しております。

私が言った、メディアが言ったという証拠が本当に数行しかないのは同業の方々に大変申しわけないなという感じがするわけで、むしろ心配しているのが、ご意見でいただいた中でメディアについて非常に厳しいご意見をいっぱいいただいており、中にはこちらに電力会社の関係の方もおられるわけですが、広告をいただいているということで、我々の報道が偏向している、間違っているのだというご意見までいただいて、日頃どう思われているのかなということを大変反省するというか、悩んだというかということを考えております。

ただし、今回の経緯を振り返ってみましても、先ほど前田委員から怪文書が出たというようなことがちらっとありましたが、それもメディア経由で出まして、当初から言えば、むしろメディアは今回の政策大綱について言えば、核燃料サイクルを含めてむしろ反対だったのかなという立場でやってきたので、どちらかというところのご意見にあるような広告をもらっているから偏っているというよりむしろ反対のことも、みんな好きなことを結構言ってきたんだと、それでその中で1人私が参加させていただいて、ますます好きなことを言わせていただいたと

ということです。それで、ただメディアというのは、言論、伝えるということの観点からこの（案）の中には書かれているわけですが、言論という論の部分もありまして、こうやってまとまってみると論の部分がとりあえずある方向性が出たということで、メディアの論の方も興味をずっと失って、まとまりかけるとどんどん報道が小さくなって、この間の大綱（案）が前回まとまったというときもほとんどみんな小さい扱いでして、どんどん小さくなってしまったと。ただ、これメディアというのは、実は怖くて、これじゃあまとまっちゃったんだからしょうがないのかなと思っているわけではなくて、これからとりあえずの方向出て、ただし具体的な課題はいっぱいあるわけですから、大綱（案）によくいっぱい書いてあることですが、切望するであるとか、期待するという言葉があるわけですが、これは期待してどうなったのかということはこれ原子力委員会の方、あるいはこの長計策定会議に参加された皆さん、私も含めて今後どういうふうになるのか、とりあえずの方向に向かって着実に進むのか、あるいは情勢が変わったときに適切な方向に変わるのか、いろいろなことを含めて関心を持っていて、なおかつ私はメディアの者ですから、またいろいろな意見を言わせて……紙面、あるいは言論を通じて言わせていただくことはあると思いますが、委員会についてもこの切望・期待というものを適切に評価し、実現していくことを希望したいなと思います。

どうもありがとうございました。

（近藤委員長） ありがとうございます。

井上委員。

（井上委員） 1年3カ月お世話になりましたありがとうございます。何とか体力ももちまして今日を迎えることができました。ありがとうございます。

国民、市民、生活者の1人として、この原子力政策の策定プロセスに参画させていただいて、大変貴重な経験をしました。原子力委員会の委員の皆様、事務局の皆様、本当にお世話になりました。ここで学びました、私が得ました知識、それから政策の内容をこれから地元に帰ってともに学ぶ仲間たちに伝えていくことがここに参加させていただいた私のこれからのできることではないかなと思っています。

次に、この先、日本のエネルギーの安定供給のため、今この計画がつつがなく実現していく、その過程をまた見守っていきたいと思います。

3つ目に、国民に呼びかける広聴・広報という明記されました。大変、これからさらに充実していくと思いますが、かつて100万人キャンペーンというのがありました。あれは、私たちが現場に行って、本物を見て、その場で、肌で、目で見るという学習を体験しました。ぜひ

これからもそういう学習ができるように期待したいと思っております。

以上です。ありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

岡崎委員。

(岡崎委員) ありがとうございます。

1年3カ月前にこの会議に付託された大変重要な使命ということに対して、特にこれまでの原子力政策の大きな転換点とも言えるこういう時代の中で大変幅広い、もちろんエネルギー・核燃料サイクル政策、あるいは放射線利用も含めた幅広い原子力活動全体について大変精力的に審議が行われて、基本的なこれからの方向を今日お示しをいただいた政策大綱という形でまとめられたということに対して、内容も含めて私は基本的に大賛成を申し上げたいと、こう思います。

しかも、この30名を超える大変大きな策定会議、原子力委員も直接この会議に参加をされて、近藤委員長のもとに、もちろん大変時間もかかったわけでありますけれども、適切にこの会議を運営されてまとめられたことに対して敬意を表したいと思います。

改めて申し上げるまでもありませんけれども、原子力の研究開発利用というのは、原子力施設の立地地域のみならず国民全般の幅広い支援、支持がなければ進められるわけでもないということであるわけであります。この会議のこういう国民からの意見の反映も含めて、会議そのものがそういう国民の理解を得ることに対して少しでも貢献ができたらなという、そういう期待も含めて、特に今後これをさらに実現をしていくという過程において前回もお願いを申し上げましたけれども、それぞれの関係者が明確にこの目標に沿ってできるような政策的なしっかりした位置づけをぜひ与えていただければありがたいかなというお願いも申し上げたいと思います。

私ども研究開発機関として殿塚委員とも、もちろん手を取りながら、この政策大綱に示された方向、あるいはその中に込められましたいろいろな問題点、あるいは将来の不確実性に対して適切に弾力的にどう対応していくかということを十分心に留めながら責任を果たしていきたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

勝俣委員。

(勝俣委員) 33回にわたる策定会議を振り返りますと、非常に多面的、多角的に聖域なし

に議論されたということ、そして多様な委員の意見、あるいはパブコメも含めまして、非常に広聴に徹した、これが特色ではなかったかと思います。その結果といたしまして、大綱という名称にふさわしい基本的理念と考え方が示され、そしてサイクルを含む原子力の重要性とその推進へ向けての取り組みがきちんと取りまとめられたと思っております。

近藤委員長を始め、事務局、そして委員の先生方には多大なご尽力をいただきまして、原子力事業に携わる当事者として大変感謝する次第でございます。どうもありがとうございました。

原子力につきましては、日本のみならず国際的にも多少フォローの風が吹いてきたかなと考えておりますが、現実を振り返りますと、課題山積という状況かと思いますが、一つ一つ着実に前進していく所存でございますので、よろしくご支援のほどお願いいたします。

どうもありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

神田委員。

(神田委員) この策定会議が始まったときに、最初の7回目、8回目ごろというのは本当に退屈のような、いや、こんな議論していいのかなというような気がしました。民主主義というのは大変なんだなと思って。いろいろな意見を聞いて、あっちゃこっちゃ話が飛んでいくのがちゃんとまとめられていったという、僕はよく近藤先生、そちらの方向を我慢してやられたと、僕だったらもう短気起こすようなことが何回かあったような気がしましたけれども、うまくまとめられてすばらしかったと思います。

それから、明確になったことは、これからどうあるべきか、原子力というか、これがどうあるべきかという道が非常にはっきりしたという点では、本当に携わっている人間もそれを眺めている人もすっきりしたというふうに思います。

例えば、30%、40%の話でもサイクルを確実にして、あるいは高速炉の2050年の話とか、あるいは平和利用に徹した日本のあり方というものは世界に対してどんなところにあるかというのは、こういう議論ができたというのは本当によかったと思います。

それから、僕がこんなことを言うのも生意気かもしれませんが、この会議が非常にうまくいった1つに、伴委員が急速に成長されたというのがあると思いますね。最初はどんなだと思っていたんですけれども、回を重ねるごとに知識が広がり、反対されていたということもありますけれども、非常に明確なことを言われたと、これは大変よかったと思います。それから、ますます今後に期待したいと思いますね。これからもそういうますます学習をして、

鋭い目で批判をしていただくというのは我が国にとって大変重要なことではないかというふうに思いました。

それから、ちょっと心残りだったのは、法体系のところを何回も発言したんですけれども、とうとう法律の大改正についての意見というのは述べられなかった。いつかはやらなきゃいけない我が国の大きい宿題ですから、これは何かの折にぜひお願いしたいと思いました。

それから、先ほど吉岡委員もおっしゃいましたけれども、英語版を早くお作りいただくとより効果があるんじゃないかという気がします。

それから、これから大綱ですから１０年間ぐらいもつだろうということに関して、どういうふうに実施するかという、その実施をこの策定会議に参加した者は十分監視していくというのはおかしいですけれども、よく見守って、１０年間かけていろいろな課題を実施していくという点に関して、何らかの形で我々注意深く、ある程度責任を持ってそれに関与していくべきではないかなというふうに思いました。

とにかく、３３回、本当に思い出してもよくあれがここまできたというのは実感でございます。

どうもありがとうございました。

（近藤委員長） ありがとうございました。

木元委員。

（木元委員） ありがとうございました。本当にお疲れさまでした。

こうやってしみじみ大綱を見ていると、先ほども山名委員がおっしゃいましたけれども、原子力とは何か、なぜ日本は原子力利用をするのかということの最初のところ、原理原則、原点のところからトレースを始めていったということが大変うれしく思っております。まして、十分とは言えないかもしれませんが、この核燃料サイクルの４つのシナリオを作って検討を始め、その検討の結果がここに反映されているということの意味、これはとても大きなことであったと思いました。私は原点からトレースして、検討するんだという思いがありましたが、ここで告白させていただくと、この４つのシナリオを掲げましたときに、抵抗勢力という用語弊がありますけれども、いや、これはもう日本の既定路線であると、これは、ここまでやってきたのだから、何をそういうふうに原点まで戻ってかき回すんだというお声が随分ありました。原点からのトレースに異論はない一般国民の目から見ると、そういう強い声の存在はなかなか見えてこないし、勢力というと、嫌な感じがあるんですが、ある意味では国益を担い、善意で事業の展開をなさっていると重々承知しているんですけれども、決まった路線をなぜひっくり

返すかという懸念を持っていたことに、私はちょっとびっくりしたことも事実です。ですが、それでも、それも真実であり、その視点をしっかり加味しながら討論できたということはよかったと思います。また、伴さんのような立場の方のご意見の中にいろいろな示唆に富んだのがありまして、ここで相互に視点を広げられたということが大変よかったと思います。

原子力行政というのは、1回決まったものは、もう考える必要はないということではなくて、常に原点に戻って、これでいいのかなと考える姿勢が、いつも繰り返し必要ではないかということもここでも確認させていただきました。その意味で、この大綱はとても大きな役割を果たしたのではないかと思います。

それから、私の立場から申し上げさせていただくと、広聴という言葉は、原子力の世界の中に取り込むことを努力いたしました。千野委員でしたかしら、広聴という言葉は聞いたことがないとおっしゃってくださって、ここで解説できたこともよかったと思いますし、今勝俣委員も広聴に徹したとおっしゃって、かなり広聴という言葉のヒット数が多くなったと喜んでおります。やはり広く聴いて、そして国民の理解の上に成り立つものだということをここで確認できたということも1つの大きな収穫だったと思います。その意味で、この大綱の中の第2章の2-4、2-5あたりから原子力と国民・地域社会の共生ということで、2-5-1から5-6まで書いてありますけれども、多分、ここが次第にウエートも増してきて、次の大綱を作るときにはこれが1つの章立てになり得るかもしれないぐらいの期待を持ったわけですが、でも、そのことの意味は、原子力が、普通に身近に語られるような形になることが望ましいのであって、その意味でこの原子力と国民・地域社会の共生というところが今後膨らんでくるのかなと期待をしております。

それで、今神田先生から英語版という話もありましたけれども、ぜひぜひお願いしたいことは概要を作らせてください。やはり、この大綱は一般の方がお読みになるのはとても大変だと思うので、いろいろなご意見をいただきながら、絵を入れ、わかりやすい言葉とか、わかりやすい内容にまとめて、簡単に持ち歩きできて読めるようなものを作ったらどうかなという気がしておりますので、これをぜひお願いしたいと思います。

お願いを込めまして本当にありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

草間委員。

(草間委員) どうもありがとうございます。

33回の議論を経て、こういった大綱という形で大変最初に比べますとわかりやすくまとめ

られた事務局、近藤委員長のご努力にお礼申し上げます。皆さんどう考えるかわかりませんが、一応、私は原子力に利害のない放射線防護という立場から、この大綱の作成に参加させていただいたつもりであります。前回の原子力長計も参加させていただいたわけですが、前回と比べまして今回大綱は大きく3つの点で大きな特徴があったんじゃないかと思います。

まず、1つは先ほどから委員の構成にご異論があるようではありますが、広いスペクトルの方たち、委員を選んでいただいて、本当に真摯に、全員で分科会を作るという形じゃなく、全員で1つの大綱を作り上げるというところに議論したということは、私はこれは大変よかったんじゃないかと思います。

それと、もう一つ、2番目の特徴としましては、この大綱を作り上げるまでに、2回のパブコメを含めまして、原子力委員会の説明会とか、様々な国民の皆様のご意見を聞く機会を持ったということが2つ目に大きな特徴じゃないかと思います。

3つ目は、反対のご意見もありますけれども、やはり数値目標をきっちり出したということで、原子力の1つの本当に目標ができたということで、その3つが大きな特徴じゃないかと思っています。

先ほども申し上げましたように、パブコメを含めまして、あるいはここで全員の委員が、その議論をしたということで、最近様々な政策決定のところでステークホルダーインボルメントというものを盛んに言われるわけですが、私はこの原子力政策大綱というのはまさにそのステークホルダーインボルメントの最初のプロダクトではないかと思っています。だから、そういう意味では、大変国民の意見も反映された大綱ではないかと思っています。先ほども言いましたように、数値目標が示されたということで、責任が大変重くなったんじゃないかと思っています、特にどう実行していくかということを含めまして。そうなりますと、まさに骨の髄まで原子力委員会の近藤委員長がこれからますますリーダーシップを発揮して、この政策をどう進めていくかということをやったださるんじゃないかと大きく、まさに原子力のリーダーであるということを、私はこの大綱の作成の過程で改めて認識しました。

それと、もう一つ、先ほど何人かの委員が言っておりましたように、これだけ多様な意見のあるものをこういう一つの形にまとめられるという、近藤委員長の座長としてのリーダーシップを本当に勉強させていただきました。

どうもありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

児嶋委員。

(児嶋委員) ありがとうございます。

私は、この大綱にももちろん賛成であります。大変いい大綱ができたと思っております。そして、またこの大綱によって、私は原子力の政策に強い柱を立てることができた。あるいは一本筋をきちんと立てることができたというふうに思っております。

日本のエネルギーセキュリティがある程度これで確保できるという確信といいますか、を持つことができたのではないかと思っております。もちろん、多くの課題がございますけれども、その課題をきちんとかなしていくことによって、いろいろなエネルギーを何とか確保できるのではないかとこのように思っております。

日本の原子力政策を幅広い視野で皆さんとともに検討できたと、そういう意味で総合的に私は評価できたのではないかとこのように思っております。その点は、吉岡委員とちょっと私は違うんですけども、私は総合的に評価した結果、このような大綱案にまとまったというふうに思っております。

原子力エネルギーを基幹エネルギーとして位置づけるとともに、高経年化対策、あるいは核燃料サイクルを維持すること、そしてまた高速増殖炉開発研究方針を確認すること等々、非常に原則的なことがきちんとかここに書くことができたということも評価したいと思います。

私も高速増殖炉にいろいろとかかわることがありましたんですが、この高速増殖炉について2050年商業ベースというのは、私としてはもっともっと早くから開発されるべきだと思っております。その前の前の長計では2030年だったんですが、それを2050年にむしろ後退したという感覚を実は持っております。しかし、客観的な情勢を見てやむを得ないことかとは思いますが、もっともっと高速増殖炉の開発については早く、確実に、着実に進めていくべきであると思っております。

さて、この長計について、いつも5年間で見直しという歴史を刻んでこられたわけですが、この大綱になって、果たしてどうなのか。5年でなくては、私はこの大綱は多分10年ぐらいいもつだけの値打ちがあるものであると、それほど重要に皆さんの広い視点が込められていると私は思っておりますが、この見直しについては必要に応じて見直していくということで、私は10年ぐらいいいんじゃないかなというふうに思っております。

いずれにしろ、この大綱を内閣府に報告でなくて、閣議決定といいますか、こういう方向に持っていったいただいたら、より確固としたものになると。そして、また閣議決定によって、各省庁、各政策が非常に積極的に進んでいくのではないかとこのように期待しております。

いずれにしろ、近藤委員長を始め、原子力委員会の皆さんの大変なご努力と、そしてまた内閣府の事務方のこれまたもう日夜、恐らく徹夜されたことがあるんじゃないかと思いますが、大変な事務能力を高く評価し、そしてまた心から敬意を表したいと思っております。本当にありがとうございました。

（近藤委員長）　ありがとうございました。

齋藤委員。

（齋藤委員）　ありがとうございます。

18人目となりますと、余り変わったことも申し上げられないかと思しますので、少々これまでのご意見と重複するところをご容赦いただきたいと思えます。

私ももちろん33回全部出席させていただきましたが、思い出してみますと、2回前の平成6年の長計を作るときには、私は安全確保ということをやはりきちんと書くべきであると主張いたしました。余り賛成が得られないところ頑張ったという思いがあります。今回は、前田委員もおっしゃっておられましたように、最近事故、トラブルが多くあったというようなこともあり、まさに入口論として安全の確保、国民の信頼の回復と、それから廃棄物の処分の問題、これが非常に重要であり、これらが基盤的な活動の強化ということで、原子力発電いかにあるべきかの前に位置づけられたということは評価されて良いのではないかと思います。

そして、その次に、先ほど来皆様方おっしゃられましたように、電力自由化という新しい環境のもとで、いかに原子力発電を続けていくのか、核燃料サイクルをいかに続けていくのかということを相当徹底的に議論され、こういう形にまとめられたということは非常に大きな成果ではないかなと思っております。

いみじくも、今週の初めにIAEA、国際原子力機関の総会があったわけですが、冒頭エルバラダイ事務局長の挨拶で、まさに世界各国で地球規模のエネルギー需要の増大、あるいはエネルギー供給のセキュリティの問題が顕在化していること、それから、地球温暖化のリスク、こういったことで各国の原子力に対する態度が変わってきていると述べられております。そういう意味では、私どものこの大綱というのは先取りした形で決めることができたというような感じもしております。

以上が1点でございますが、2点目は当然のことながら、これだけいろいろ重要なことをこの大綱の中に折り込んでいるわけですが、いかにこれを行政庁並びに産業界等々で具現化していただけるかということが非常に重要であり、私ども原子力委員会としても、一緒に国民の期待に応えていかなければいけない重要な問題と認識しております。

また、ご案内のように、ウラン濃縮、あるいは再処理の問題で国際的にいろいろな動きがございます。そういうことに左右されるということもございますので、その辺はやはり我が国の原子力事業の進捗、それから国際的な動き、こういうことを見ながら、柔軟に我々はこの大綱と照らし合わせてどう対処していくべきかというようなことを日常的にやっていかなければいけないと思っております。

それからもう一つ、初回の会合でも申し上げましたが、原子力委員会とは何をやっているんですか、原子力の政策大綱とは何ですかということを一般の国民の方にできるだけ分かっているように浸透させなければいけない、そういうことも私ども始め、皆様のご協力を得てやっていく重要な課題であろうかと思っております。

いずれにいたしましても、1年3カ月にわたる、非常に長期にわたりまして、大変お忙しい皆様方にお集まりいただいてこの大綱をまとめることができ、原子力委員の1人として心より感謝を申し上げる次第であります。

どうもありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

笹岡委員。

(笹岡委員) ありがとうございます。笹岡でございます。

まず、33回に及びます精力的な取り組みについて近藤委員長を始め、委員の皆さん、そして事務局の皆さんのご努力にまず敬意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

私、現場の第一線で働く者の視点とか、または反省点、それからもう一つはシビリアンコントロールをもとに、普通の国民がどのような幸せを願っているかと、こういったポイントで発言させていただいたと、このように思っております。そういう意味で、この原子力政策大綱についてはタブーを設けなくて総合的に評価するプロセス、そしてしっかりした政策、こういったものを決定できたというふうに思っております。それは原子力政策に対します安定感ですとか、安心感、そして信頼感ができたと、このように思っております。したがって、国民に受け入れられるとこのように思っておりますので賛成であります。

今後でございますけれども、これは作ったわけでございますので、今後さらに国民に理解浸透をいかにするかということが非常に必要だと、このように考えておりますので、その重要な役割をぜひ原子力委員会の皆さん方にお願いますし、私も私の立場でそういったものを周知徹底するように努力したいというふうに思っております。

そういう中で、1点だけ、先ほど児嶋委員からお話ありましたけれども、次回以降の策定

会議におきまして、規範となるものについてゼロベースから論議するということが本当にいかどうかですね。これについては、ぜひご検討いただきたいというふうに思っております。

電力総連といたしましては、数多くの組合員がサイトですとか六ヶ所村で働いているわけですので、日本のエネルギー政策の一翼を担っているということに私たちは誇りと自信を持っております。

そういった中で、先ほどもお話ありましたが、とりわけこの委員会は昨年6月21日に第1回が発会したわけでありますけれども、その前段でIAEAの通常理事会におきます冒頭のエルバラダイ事務局長の報告で、日本の原子力活動については真に平和目的以外の意図がないと、こういった発言をされて、私どもは非常に先人が作ってくれた政策の確かさというものを再確認いたしました。特に、連合を含めます労働運動の中におきまして、いまだ原子力発電はプルトニウムを作って、核爆弾を作ると、こういうロジックで活動方針の中でまだ明記しているところがございますので、そのエルバラダイ発言は、まさにロジックをぶっ壊したというふうに私どもは思っておりますので、各地域の運動におきまして、これは心強く、私どもはそういったものを持って主張していきたいと、このように考えております。

私たちはこれまでどおり、体力、気力、原子力とこういった立場で、今回の原子力大綱をさらに魅力あるものにするように取り組んでまいりますので、今までのご協力に心より感謝して私の発言といたします。

どうもありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

佐々木委員。

(佐々木委員) ありがとうございます。

本日20人出席されていて、私が20番目ということで、非常に発言の中身をどういうことを発言したらいいのか非常に難しい、ほとんど多くの方がもう言ってしまったことになるからです。

どうして、今日は私はここの席に座っているんだろうかなとちょっと考えました。普通は大体「佐々木」というのは真ん中ぐらいなんですよ(アイウエオ順だと)。だから、発言に非常に有利なのですが、ここに座って「殿塚さんの方から」と来ると「うわ、これはしまったことになった」というふうに冒頭思いました。恐らく、これは、この会議の中で、恐らく近藤委員長さんとか森本さん、それから前任の後藤さんとかに対して、私がいろいろいじめるような質問や意見を申したことの罪なのかなというふうに思って覚悟していました。

冗談はさておいて、まず新しい計画の策定会議に私は今回新人として参加をさせてもらったわけですね。そういうことでしたから、長期計画というのはどういうものだろうかというものを過去の何回かの長計を随分途中でも検証という変ですけども繰り返して目を通して、それで今ここで我々が議論していることと照らし合わせながら、いろいろ幾つか発言を申し上げたと思うのです。そういう点から、やはり今回は「政策大綱」という名前になりましたが、それをやはり評価する場合に、これまでの「長計」と比べて評価するということも1つあるというふうに思います。そのときに、自分が参加していて、ほかの自分が参加していなかった長計と比較して評価云々をいうのはおかしいですけども、それにもかかわらず、若干うぬぼれを入れながら見ても、決して勝ることはあっても劣ることはないんじゃないかというふうに過去の長計と比べた場合、今回の政策大綱について、私はそういうふうに評価をしてもいいのではないかというふうに思います、これ正直のところ。

それから、もう一つは、これを外の方が評価する場合に、この「政策大綱」だけでなく、我々の長い33回ですか、わたる会議の中で、途中で随分、（卓上の資料の中にありますが）「論点の整理」とか「中間的取りまとめ」というようなものを出してきたわけですね、いろいろなテーマについて。これらをやはりセットで読んでいただいて、全体として評価をされるということを私は期待するとか、そうしていただきたいなというふうに思います。それが公式の見解。

それから、全体の、参加させていただいて、大きな感想を若干申し上げたい。

1つは、まず「長かったな」ということですね、33回というのは。特に、私はサイクルの小委とかいろいろの方にも入れさせてもらったものですから、物すごく密度が濃かったというか、月何回も上京しなきゃいけないとか、いろいろなことがございました。そういう意味で非常に長くて割ときつかったということがございます。しかし、それはやはり第2番目の感想とも関連しますが、特に少数意見の方々、その意見に対して近藤委員長がほかの方もおっしゃいましたけれども、非常に丁寧にというか、耳を傾けられたというふうに思います。やはり、今から思うとスローだけでも、入念というか、非常に慎重だったというか、やはりそれでよかったのではなかったかなというふうに思います。私もこの辺については非常に学ぶべきところがありました。ありがとうございました。

それから、もう一つは、やはり我々がかわった問題について、世間の評価というのか関心が非常に大きかった。これはパブリックコメントに寄せられた件数を見れば、（私の少ない経験で、ほかの幾つかのパブコメに立ち会った経験と比べても）今回非常に多かったというふう

に思います。事務局はこれを整理して、類型化されて多分非常にご苦勞ではなかったのではないかとこのように思います。

そういう意味で、これから先、今度、今回の「政策大綱」という名前、「新計画」というよりもそういう名前になりまして、10年ぐらいもつのだらうということですがけれども、最後に私は、多くの方が今回技術とか理科のご専門の方が多かった中で、私は社会学者というか、経営学者の1人として、今回新しい「新計画」策定に加わることができたということを非常に誇りに思っております。

ありがとうございました。

(近藤委員長) ありがとうございました。

そういたしますと、今日ご欠席の委員のうち、お手元の御発言メモの最初には末永委員の見書がございます。また、この(案)についてすでに賛成する旨のご発言をいただいた以外の委員の方につきまして、本日この議論の進行によってはこれで最終的な意見表明をいただいて、議論を終結したいということをご連絡したところ、そういうことで結構とのご連絡をいただいておりますので、以上をもちまして討論は終結とさせていただくことにいたします。

そして、したがって、この会議のアウトプットは、原子力政策大綱(案)というタイトルの資料第2号ですね、もちろん参考資料等も全部含めてですね、それから国民からいただいたご意見に対する対応(案)というところ……失礼いたしました、それは会議資料ですね。それをもって多数意見とし、それから、伴委員からの2枚もの、吉岡委員からの2枚ものを少数意見ということで重ねてこの会議の議論の成果とするということにさせていただければと思いますが、よろしゅうございますか。

それでは、そのようにさせていただきます。

なお、もうないとは思いますが、なお見直していった修辭学上の問題がどうしてもということがあるかもしれません。その場合の修正については委員長にお任せいただければと思いますが、よろしゅうございますか。

それでは、そのようにさせていただきます。

そういたしますと、この策定会議は座長である私から原子力委員会にこれについて報告し、原子力委員会としてこれについて審議し、しかるべくの決定を行うということになる予定としております。

本策定会議は、恐らくそこで決定ということをした段階で廃止と、これは策定会議の設置趣旨に成案を得た段階で廃止すると明記されておりますので、そのような扱いにさせていただ

くことになります。

この間の経緯につきましては、事後になると思いますけれども、改めて書面等で皆様にご報告させていただくことにいたします。

それから、この大綱の政府部内における取り扱いにつきましては、もちろん皆様からいろいろご提案、ご示唆、あるべき姿についてご発言いただいているところ、前回既にして、これについて総合科学技術会議にご報告し、どのような議論があったかについてのご紹介申し上げました。そのようなプロセスを踏んで、ご希望に応える、沿うような形で手続が踏めるべく鋭意努力をしている最中ですが、まことに申しわけありませんけれども、しかし今最終的にいつこうなるということを断言できる状態にはありません。前は今日に間に合うかなと考えていたのですが、ご報告できません。ここでお詫び旁々、皆様のご希望、ご期待に添えるように最善の努力をすることをお約束し、ご理解を賜りたいと思います。

資料等の取り扱いについては以上でございますが、よろしゅうございますか。

吉岡委員からご発言の資料について委員会のウェブページに掲載してくれというご意向ですが、最近の大学の先生は大体皆さんご自身のウェブサイトにもそういうものを載せておられるようで、吉岡委員のサイトがあるのかどうか……私ちょっと探して見つからなかったんだけれども……

（吉岡委員） ないんですよ。

（近藤委員長） ないんですか。ウェブページを持たない大学教授というのは、最近希少価値があってない方がいいのかもしれないけれども、ぜひこの機会にご自身のサイトを整備されてそこへ載せておられればよろしいのかなというふうに思います。余計なことを申し上げたかもしれませんが。

そうすると、これで事務的に申し上げることは終わりかと思えます。よろしければ、最後に原子力委員会を代表して一言御礼を申し上げます。皆様におかれましては、昨年6月の第1回会議以来、本日の第33回会合に至るまで本務ご多忙中にもかかわらず、万障お繰り合わせの上、重なる会議にご出席を賜り、原子力政策大綱（案）について熱心なご審議を賜りました。皆様のこの国の原子力研究、開発及び利用のあり方をめぐっての真摯なご議論と、それから日程とか議事運営に対する我々の無理なお願いに絶えずご協力を賜りましたこと、そのお陰をもちまして、本日ここに議論を締めくくることができましたこと、まことにありがたく、心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

最後に、皆様から本日いろいろいただきました本案にかかわらない議事運営のまずさとか、

その他いろいろご注意等につきましては、いろいろと申し上げたいこともありますけれども、言わぬが花という世界のことだと思いますので、別の機会にぼろっと漏らすかもしれませんけれども、今日はじっとこらえて、これにて発言を終了させていただきます。ありがとうございました。

事務的な連絡があればお願いいたします。

(森本企画官) ありがとうございました。

議事録の確認でございますが、今日席上に配付させていただいております第32回の議事録を10月5日までに確認いただいて、また本日分につきましては、後ほど事務局の方で作成しまして、確認の依頼を行わせていただきたいと思います。それにつきましては、また送付させていただくとともに公表するということでウェブページに載せるということにさせていただきます。

それでは以上でございます。

ありがとうございました。

(近藤委員長) それでは、以上をもちまして、本策定会議を……万が一、34回を緊急招集する可能性はゼロではありませんが、とりあえずここで中締めとさせていただきます。

本当に長い間ありがとうございました。本日はこれにて終了させていただきます。